

古典派音楽の時代

～フランス革命と市民の音楽～

(1740年頃～1809年頃)

サウンドデザイン演習
女子美術大学 石井拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

2015

18世紀のヨーロッパ。

この時代の音楽の文化的な意義とは？

18世紀のヨーロッパにおいて

「神に捧げるためでもなく、

王侯を賛美するためでもない、

『市民による、市民のための、市民の心に訴える音楽』が、
初めて生まれたのである」

[岡田 2005 :96]

本日の流れ

1. 「古典派音楽」が生まれる時代背景

※音楽に限らず「芸術の誕生」に関わるうえで重要

2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

3. 「古典派音楽」の代表的作曲家

「古典派音楽」が生まれる時代背景

1
時代背景

「近代」とは？

きんだい 【近代】

1 時代背景

2. (modern age) 歴史の時代区分の一。広義には近世と同義で、
一般には 封建制社会 のあとをうけた 資本主義社会 についていう (広辞苑 p.733)。

中世
↓
近世

11C頃「封建社会」
17C頃「絶対王政」を経過

(主従関係)



↓
近代

18C末「フランス革命」
「市民社会」の成立 (封建社会の打破)

(自由と平等)

近代主義 modernism

1 時代背景

- ・ 秩序よりも進歩
- ・ 宗教よりも科学
- ・ 個別主義 (※具体) よりも 普遍主義 (※抽象)
- ・ 属性原理 (※ 身分など) よりも 業績主義 (※ 実力) が尊重

封建社会から資本主義社会への進化・発展の駆動力の一つが、**この種の エートス**。

(高橋徹 「近代主義」 『世界大百科事典 7』 平凡社、pp.630-631 より)

「この種のエートス」
(持続的な特徴)

=

啓蒙主義 的特徴
(蒙きを啓らむ, くらきをあきらむ)

• 啓蒙思想 Enlightenment

1 時代背景

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
 - 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
 - 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
 - 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
 - **基本的人権** (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽
 - その成果は『**百科全書**』 (**ディドロ**ら編, 1751-80) に編纂
-
- 「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活**へ
 - 啓蒙思想が「近代」を導いた

1
時代背景

「**啓蒙主義** とは『伝統社会』からの脱却である」

「〔ヨーロッパの〕『伝統』の破壊と『新しい価値』の創造こそが
啓蒙主義 精神の主眼だった」

「**啓蒙主義** とは まさしく **人間を『神』とする思想** だった」

松宮秀治『芸術崇拝の思想』pp. 80-82.

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

1
時代背景

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

- 絶対主義を解体させて、近代に特有な「市民社会」を実現させる革命
- ここでの「市民」とは？
 - 国政に参加する国民。国の形成に自律的・自発的に参加する人。
 - 市民 = ブルジョアジー（大土地所有者、資本家、高級官吏、非貴族）
 - 近代国家における象徴的存在
- 「宗教的権威」と「王侯貴族」からの人間の自立（近代のはじまり）
- 基本的人権の確保（言論・表現の自由）

啓蒙思想と「芸術」(近代芸術)

「古来、**進歩的思想**という、もっとも広い意味での啓蒙が追求してきた
目標は、人間から恐怖を除き、**人間を支配者の地位につけるということ**であった」
[ホルクハイマー & アドルノ：3]

「**人間が世界の主人となる**ということは
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」 [松宮：80]

「『**芸術家**』とは**理念的にはみずから神となって**、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『**創造者**』となることである」
[松宮：67]

啓蒙思想 と「芸術」 (近代芸術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、ついに、

個人における個性的な創作としての芸術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での
「芸術」が生まれはじめる。

「個人による個性の表現」 & 「創造性の開示」としての「芸術」

1 時代背景

※ 近代の所産である「**芸術**」の誕生をうながす
歴史的契機となった「フランス革命」
の様子を、映像で観ておきたい。

テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』(2006)
(フランス制作, 抜粋 20分程度)

(※ ソフィア・コッポラ による映画よりも見応えがある !?)



テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』 (2006, フランス制作, 抜粋20分) ※ DVDでも出版されている

絶対王政の時代のフランスでは、国民は三つの身分に大別されていた。
第一身分は聖職者、第二身分は貴族、第三身分は、新興資本家階級 (ブルジョワ階級)、小商人、職人、小市民、農民。
市民革命は第三身分による革命。

ロ可可様式 Rococo Style



D.ツィンマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)
※ この建物自体は絶対王政とは直接関係ないが、

啓蒙思想が批判した文化的対象は？

ロ可可様式 Rococo Style (音楽)

- ロ可可音楽

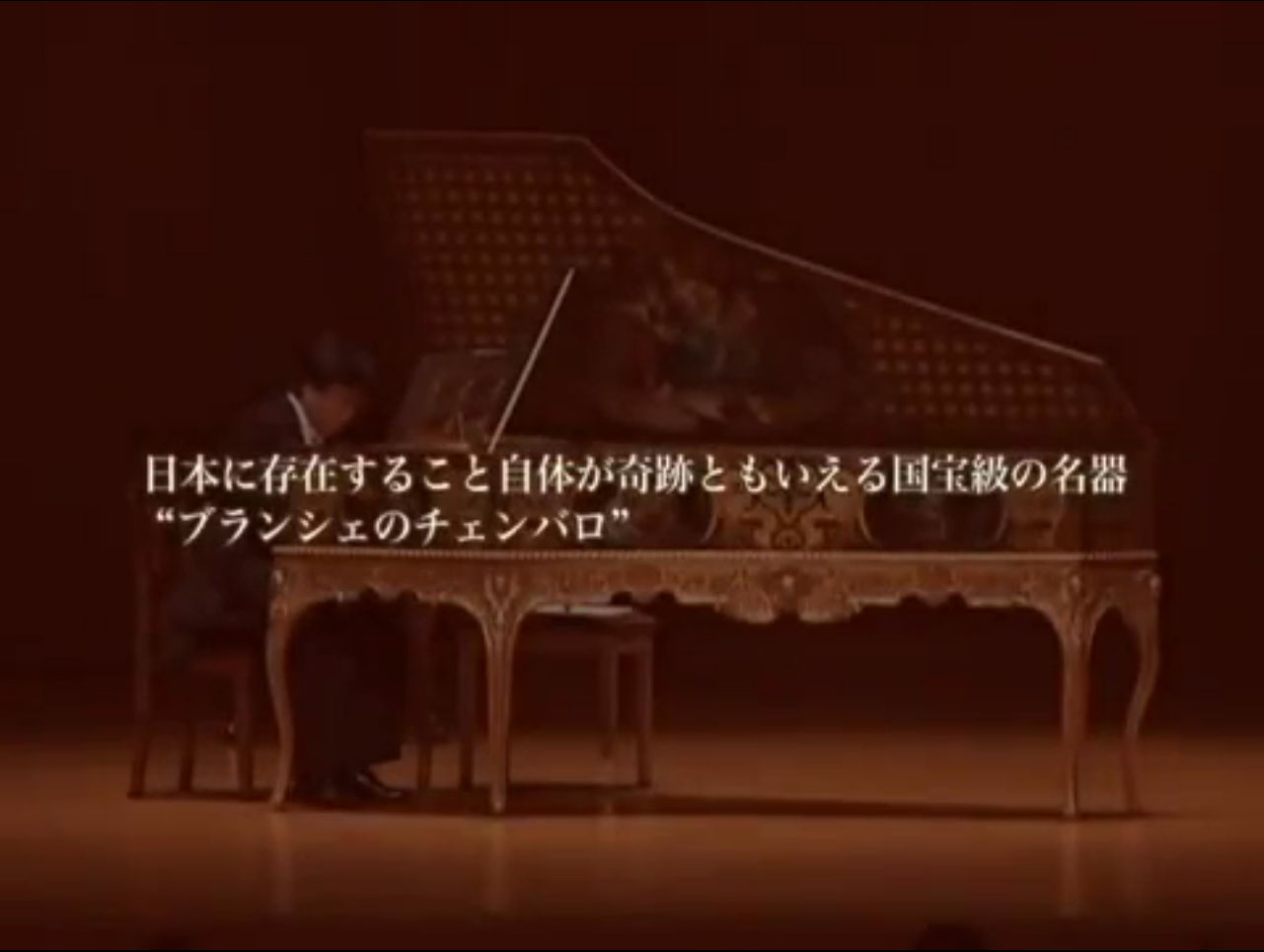
バロックの後、古典派音楽の前。

ルイ15世の時代(在位 1715- 1774)

装飾的表現、優美・軽快、貴族的・フランス的

代表的作曲家 フランソワ・クーブラン(1668-1733)

- フランスのルイ15世時代の宮廷作曲家
- ギャラント様式
- ロ可可音楽の代表作に「クラウザン曲集 1巻～4巻」(1720年頃)

A photograph of a harpsichord, a keyboard instrument with a lid that is open, revealing the internal mechanism. The instrument is ornate, with a dark wood finish and decorative carvings. A person is seated at the keyboard, playing the instrument. The scene is dimly lit, with a warm, brownish light source creating a soft glow on the instrument and the player. The background is dark and indistinct.

日本に存在すること自体が奇跡ともいえる国宝級の名器
“ブランシェのチェンバロ”

ロココ音楽 Rococo Style Music の例 (映像: 3分程度)

Youtube 「【中野振一郎氏演奏】18世紀フランスのチェンバロ / Blanchet Harpsichord」より

(この映像内での曲目)

1. ジャック・デュフリ 《クラヴザン曲集 第2巻》より 〈ラ・ヴィクトワール〉
2. フランソワ・クープラン 《百合の花ひらく》
3. ジャック・デュフリ 《三美神》

文化的分野で、啓蒙主義的に、絶対王政を批判したのが、、

ヴィンケルマン

J.J. Winckelmann (1717 – 1768) ドイツの美術史家

『ギリシア美術模倣論』 (1755)

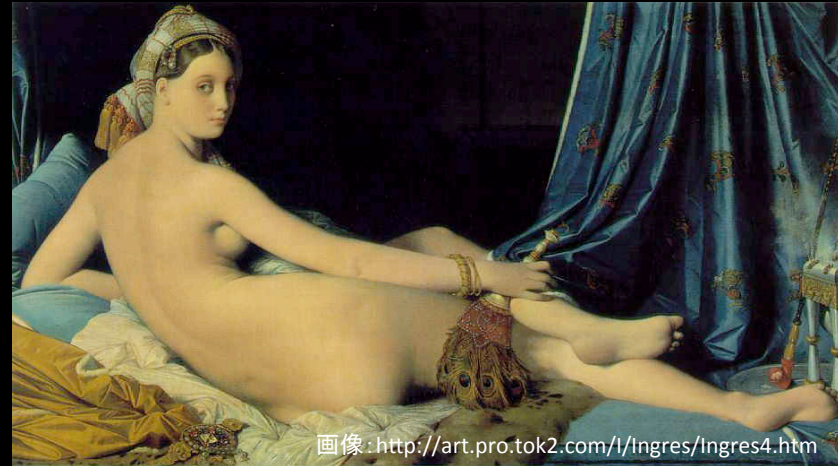
- 享乐的・感覚的な宮廷文化を表すロ可可文化の批判
- 美の規範を、古代ギリシャ芸術（彫刻）にもとめた。
- ロ可可文化を「リセット」して、新たな進歩的な文化の創設を志向した（新古典主義へ）



画像: wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より



《オイディプスとスフィンクス》(1808)



《グランド・オダリスク》(1814)

ヴィンケルマンが良しとする様式

新古典主義絵画

ジャン=オーギュスト・ドミニク・アングル (1780 - 1867, 仏)

啓蒙主義的芸術論としての
ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）の主張

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ
2. 自然、それ自体を模倣することがダメ



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

啓蒙主義的芸術論としての ヴィンケルマン『ギリシア美術模倣論』（1755）の主張

1. 〈創造性〉は神のみがもつという神話がダメ

- ※ 人間だって創造することができる。場合によっては「天才」になれる。
- ※ 人間中心主義、機械論、進歩主義などの現れ

2. 自然、それ自体を模倣することがダメ

- ※ 自然を、ではなくて、ギリシア美術の作品を模倣すべし。
なぜなら、ギリシャ彫像の輪郭の美は、自然美と理想美の
両者を一つにする最高の観念だから。線描への価値付け。
(ヴィンケルマン 30)。
- ※ 人間中心主義、合理的精神のあらわれ？



画像：wikipedia「ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン」より

啓蒙思想 と「芸術」 (近代芸術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、ついに、

個人における個性的な創作としての芸術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での
「芸術」が生まれはじめる。

「個人による個性の表現」 & 「創造性の開示」としての「芸術」

啓蒙思想と「芸術」 (近代芸術)

「『芸術』という概念が ヨーロッパの芸術理論において確立したのは、十八世紀中葉から末葉 にかけてのことである」

「十八世紀中葉以前には、今日われわれが『芸術』と呼んでいるものを〔略〕指し示す概念 ないし術語は 存在しなかった 」

「『芸術』という概念は「近代」の所産にほかならない 」

※上記全て [小田部 2001: 3]

啓蒙思想の特徴 : 「近代」(芸術) の特徴

- **西洋中心主義**

西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義**

物事 (芸術を含む) の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え

- **進歩主義**

新しいことは良いことだとする考え

- **人間中心主義**

人間は科学によって、自然を制御することができるとする

※「人間中心主義」に関しては、しかし、、、

「世界のいかなる文化圏、文明圏も西欧の啓蒙主義のような不遜な思想をもつことはなかった。どの文明も人間以上の存在者を認め、それに服することによって世界と共存してきた」[松宮 : 80]

市民革命と「展示」= 美術館の誕生

- ・ フランス革命以後「ルーブル美術館」の前身ができる。

「ミュゼ・ドゥ・ラ・ルピュブリック」

(フランス共和国中央芸術博物館)という名の美術館が開館 (1793)

- ・ 「万国博覧会」が始まる (パリ)

万国博覧会のルーツ 「国内博覧会」(パリ, 1798) = 様々な物品を集めて展示する博覧会
1849年までにパリで11回開催

- ・ 文化芸術の担い手が、王侯貴族から「市民」へと移行

2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

2

音樂的特徵

年代時期 と 音楽的特徴

・【時 期】 1740年頃 → 1809年 (ハイドンの死)まで

【前史】

- バロック (劇的表現、重厚 (通奏低音)、構築的)
- ロココ (装飾的表現、優美・軽快、貴族的)



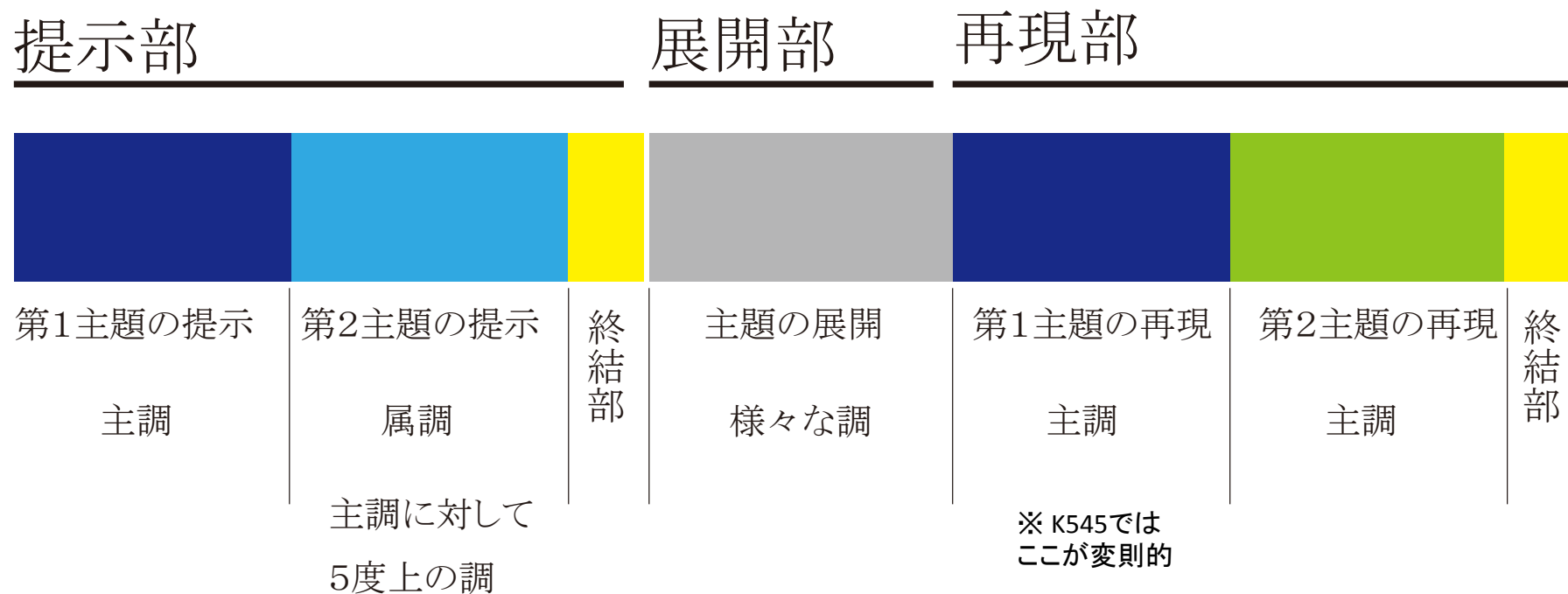
古典派音楽 (理知的表現、自然な感情発露、等身大の人間像)

古典派音楽の特徴

2 音楽的特徴

- ・他の要素に頼らない**自律的な音楽表現**を追求 → 声楽から**器楽**へ
- ・オペラ、協奏曲 から → **ピアノソナタ、交響曲、弦楽四重奏曲**へ
- ・宮廷音楽(王様のための音楽)から → 個性を表現する音楽の萌芽
- ・対位法の様式(旋律の重なり)から → 和声音楽へ
- ・「自律的な音楽」の形式としての「**ソナタ形式**」

古典派のソナタ形式とは



(※ モーツァルト ピアノソナタ 第15番 第1楽章 K545 の例 で解説, 2分30秒)



3 作曲家

古典派の作曲家

3
作曲家

古典派の作曲家



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
Haydn, Franz Joseph

(1732-1809)

『弦楽四重奏曲 第77番 皇帝』
～第2楽章



ドイツ国歌。

もともとは
オーストリア皇帝フランツ1世の
誕生日に捧げた曲 (1797)。

ヨーゼフ・ハイドン

(彼の生活)

- ・少年期はウィーンのシュテファン大聖堂 の合唱団員。しかし声変わりで解雇。
- ・10代後半からの10年間は、不遇のウィーン生活。貧困と独学。
- ・作曲は独学。(意外と!?) 叩き上げの苦労人。
- ・ハンガリーの貴族の宮廷楽長としての職務を30年間勤める。
- ・退職後、年金を貰いながら、さらにウィーンでの音楽活動を行う。
- ・オクスフォード大学から名誉音楽博士号授与。
- ・享年 77歳

古典派の作曲家



W.アマデウス・モーツァルト
Mozart, W.A.

(1756-1791)

『アヴェ・ヴェルム・コルプス』
K.618 (1791)



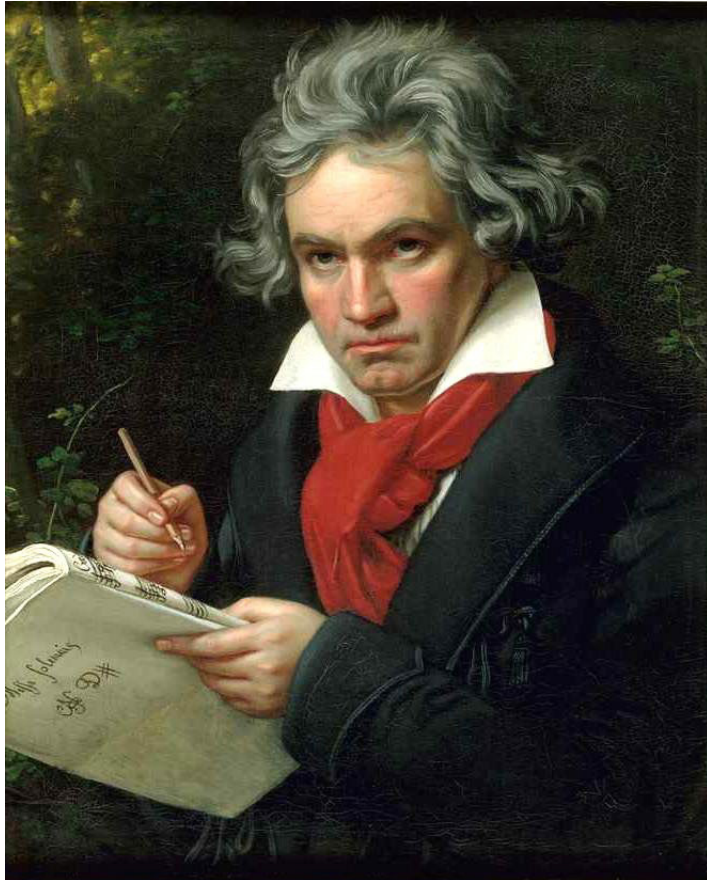
最晩年の傑作。
リストやチャイコフスキーも編曲。

W.A.モーツァルト

(彼の生活)

- ・ザルツブルグの貴族の元で宮廷音楽家となるが、喧嘩して解雇される。
- ・ウィーンに移住して、フリーの音楽家となる。
- ・前職の経緯があり、ウィーンのハプスブルグ帝国の皇帝から警戒され冷遇。
- ・貴族の子弟にピアノを教えたり、作曲料で生活する（商業音楽家的生活）。
- ・後年、宮廷室内楽作曲家に任命されるが、これは薄給のポストであった。
- ・享年 35 歳

古典派の作曲家



L.ヴァン・ベートーヴェン
Beethoven, L. V.

(1770-1827)

『ピアノソナタ 第21番 ハ長調
ヴァルトシュタイン』op.53 (1804)



彼の音楽活動を生涯支えてくれた
ボンの貴族、ヴァルトシュタイン伯
に捧げた曲。

L.V.ベートーヴェン

(彼の生活)

- ・14歳で宮廷礼拝堂のオルガニスト。
- ・17歳で尊敬するモーツァルトに会うためウィーンへ。しかし全く関心を持たれず。
- ・ボンの貴族・ヴァルトシュタイン伯に、生涯、彼の音楽活動は支えられた。
- ・22歳の時、ハイドンに認められ、ウィーンへ留学。そのまま移住。
- ・実は貴族に好かれる人であった。
- ・精神性の表現として象徴的な存在に思われるが、
実は、**ハイテク音楽**が大好きだった（ピアノのペダルの新たな使用法など）
- ・後年、ハプスブルグ家より年金を貰うが、難聴と甥の放蕩に悩む。享年57歳。

主な参考文献・さらなる知識のために

- ・ 石井宏 (2004)『反音楽史:さらばベートーヴェン』新潮社
- ・ ヴィンケルマン (1755 = 1976)『ギリシア美術模倣論』澤柳大五郎訳、座右宝刊行会
- ・ 小田部胤久(2001)『芸術の逆説』東京大学出版会
- ・ 岡田暁生(2005)『西洋音楽史』 中公新書
- ・ 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- ・ 高橋徹「近代主義」『平凡社 世界大百科事典 7 』平凡社
- ・ ドナルド・H・ヴァン・エス (1981=1986)『西洋音楽史』新時代社
- ・ 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- ・ パウル・ベッカー (1926=1951)『西洋音楽史』 河出文庫
- ・ 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想』白水社
- ・ 渡辺裕 (1997)『音楽機械劇場』新書館